

字源と書体

(38)

原田 幹久

上杉謙信（一五三〇～一五七八）と武田信玄（一五二一～一五七三）は共に戦国大名ですが、五度にわたって川中島の戦いをしたことで有名です。後世、たびたび物語として描かれています。

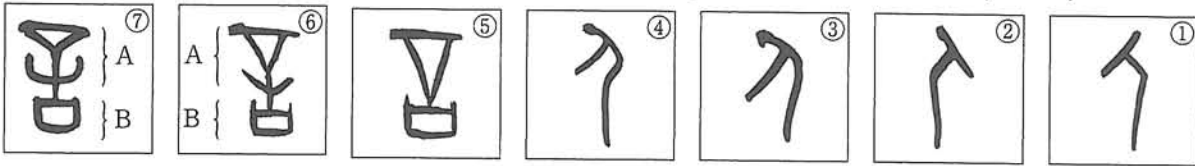
上杉謙信は、越後の虎や越後の龍軍神と称されています。

謙信の名言の一つに「人の落ち目を見て攻めとるのは本意ならぬことなり」があります。武田信玄の死に乗じて武田領への侵攻を家臣たちが進言した際、この言葉の通り、上杉軍は武田領へ侵攻することはありませんでした。仁義を重んじた謙信の人格がうかがえるエピソードです。

また、武田信玄も息子の武田勝頼に「上杉謙信は義理がたい武将なので人に頼られれば決して見捨ててはならない、自分の死後は、謙信を頼れ」と遺言したといわれています。

地元（上越市）では上杉謙信公の武勇と遺徳を偲び開催される謙信公祭が、毎年八月末に、春日山城跡であります。鎧兜に身を包み、槍や刀を持った武者たちによる勇壮な「出陣行列」や「川中島合戦の再現」などは、戦国絵巻きさながらの迫力と臨場感に溢れ、見る人を魅了させてくれます。

今回は、日本を代表する武将である



上杉謙信にちなみ「信」です。人間にとって最も大切なものは人の信頼です。「信」の文字にはいったいどんな意味が含まれているのでしょうか。

漢和辞典で調べると、音で（シン）、訓で（まこと）とあります。また、部首は（イ・人）です。偏にあるときは「イ（にんべん）」、冠のときは「人（ひとがしら）」となり、人の行動や性質などを表します。

この文字は「イ」と「言」の構成によって出来ている文字です。

先ず「イ」の文字を最古の甲骨文字で書くと①②となります。金文では③となり、篆文では④となります。一見して分かるように人間の側面形です。

次に「言」の文字を甲骨文字で書くと⑤⑥となり、金文では⑦です。また、古文では⑧で、篆文では⑨です。

Aの部分、古代中国で用いられた入墨の針を描いたもので、違約の際には入墨の刑



罰を受けることを示します。Bの部分は、誓いの書きものを入れた器の形です。

最後に「信」の文字を金文で書くと⑩⑪で、古文では⑫⑬です。また篆文では⑭です。甲骨文字には見あたりませんが、古い書籍に「信 誠也。从人 从言 会意。⑫古文 从言省 ⑬古文信（略）」（信は誠なり。人に従ひ 言に従ふ 会意（六書の一つ。漢字の意味を組み合わせて新しい字を作る造字法）。⑫は古文、言を省に従ひ ⑬は古文の信（略）とあります。

「信」は、人間の口から外に出る言葉が、内なる心と合致する意味です。もともと人と人との盟誓をいう文字です。文字の意味も「人のことばと心が一致する・まこと・まごころ（信義・背信）」、「しんじる・思いこんで疑いがない（自信・信念）」、「しるし・あいず（信号・音信）」、「あかし（信証）」、「信仰する・信じる（信心・信頼）」といったところです。

※「言」の付く文字には（言葉ではつきりとする）などの意があります。

訂 言葉ではつきりとする。記 言葉で分別してしるす。



字源と書体

(43)

原田 幹久

平成二十七年は「ひつじ」年にあたります。年賀状などでは「未」であったり「羊」と書かれていたりします。最近の年賀状では様々な工夫がされたものが多くなっています。たとえば、篆刻作品や従来の墨だけのものではなく、メタリックカラー液や化学のりを入れた個性豊かなものも少なくありません。

「未」の文字は、年・方位・月・時刻・動物に当てられています。年では十二支の八番目、方位では西南です。月では六月で、時刻では、午後一時から午後三時の二時間あまりをさします。

「未」の文字を漢和辞典で調べると、音で(ミ・ビ)、訓で(いまだ・ゆくすえ・ひつじ)とあります。

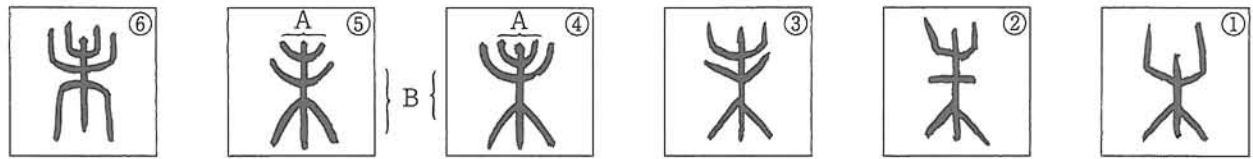
また、本や末と同じ部首で(木〵きへん)にあります。

「未」の文字を最も古い甲骨文字で書くと①②③となります。金文で④⑤となります。篆文では⑥となります。

古い書籍に「未 味也 六月滋味也(略)」「未は 味なり 六月の滋味(美味・よい味わい)なり(略)」とした一文があります。

Aの部分、枝葉が短く芽が出たばかりを表しています。Bの部分は、木を示しています。

未の文字は、十分に伸び切っていない木の小枝葉を描いた象徴文字です。木の枝葉がこれから茂ることを暗示させる文字です。



※未の付く文字には「いまだ」これから・小さくてよく見えない・微かではっきりしないなどの意味があります。味〵口ではっきりしないあじを舌で調べるさま。

妹〵小さくてまだ成熟していない女。

味〵日光が微かではっきりしない。

魅〵人をひきつける魅力は人の目に微かではっきりと見えにくい。

次に「羊」の文字ですが、甲骨文字で書くと⑦⑧⑨で、金文では⑩⑪です。また篆文では⑫⑬です。

漢和辞典で「羊」は、音で(ヨウ・ヤウ)、訓で(ひつじ)です。この音は、羊の角が曲がっている意の「天〵人の頭部をくねらす形」からきたものです。

古い書籍に「羊、祥也、从𦍋 象頭角尾尾之形。孔子牛羊之字以形舉也(略)」「羊は、祥(めでたい)なり、𦍋(羊の角に従ひ 頭・角・足・尾の形に象る、孔子は、牛・羊の字は形をもつて挙るなり(略)」とあります。これらを見ると明白なように羊の字は象形文字であるこ



とがわかります。Cの部分は、正面から角を描いた形で、Dの部分は、羊の角以外の体を表しています。

文字の意味も「ひつじ・ひつじのつ・ひつじの毛」(羊角・羊毛)、「羊の乳で作ったチーズ(羊酪)といったところ」です。

白川静先生は、漢代の「瓦罍」(鏡銘に羊を祥の字に用いることが多く、羊を神事に用い、羊神判によって祥・不祥を定めることがあったといわれています。羊は争いを好まず、仲良く群れで生活する穏やかな動物です。また、未の付く漢字には未来を指し示す意味深い字が多く残っています。厳しい今日ですが、未来の世界が開かれ平安であることを祈り信じてほしいものです。

※羊の付く文字には「おいしい・ゆたか・形が整い美しい・めでたい・くわしい」などの意味があります。

詳〵言葉や情報が豊かで説明がきらか。

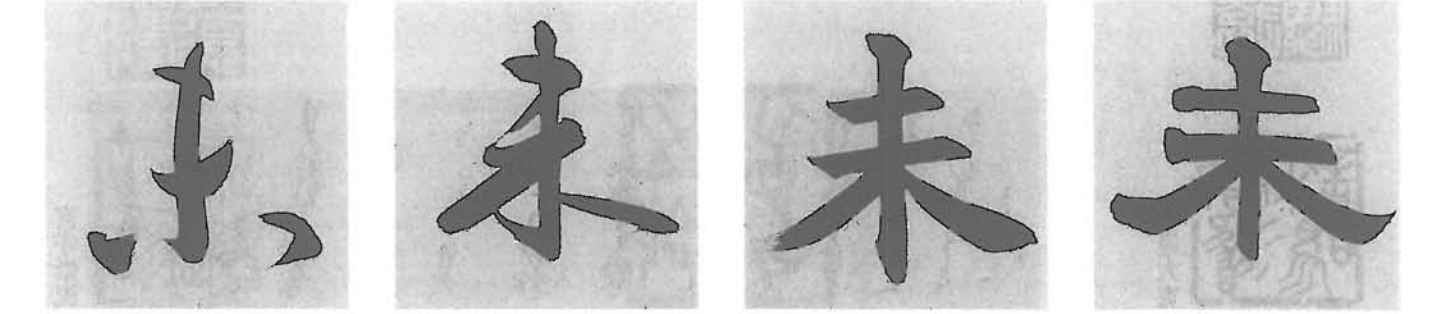
翔〵羽をしつかりと広げて美しく飛ばさま。

洋〵水が豊かで広くひろがる。

※瓦罍〵丸瓦の先端(軒丸瓦)。土を固めて焼いた瓦。古くは半円であったが、秦・漢代以降は円形が多く、漢代のものには神話伝説よ

があり、刑死者の姓名をしるす葬罍も残されている。

草書 行書 楷書 隸書



字源と書体

(8)

原田幹久

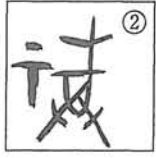
福岡で育ったこともあって、博多に行くといつも食べたくなる一品があります。郷土料理の一つ、筑前煮です。筑前者は別名「がめ煮」ともいいます。この料理は、鶏肉と竹の子、ごぼうなどの野菜をいっしょに炒め煮したものです。豊臣秀吉が朝鮮に出兵をする際、その大軍が博多に宿兵したときに食べさせたものです。その当時、博多の入江などにスッポンが多くいたので、スッポンを捕まえて野菜といっしょに煮て食べていました。スッポンのことを(ドロガメ)とよんでいたのので、この料理を「がめ煮」ともいいます。その後、スッポンの代わりに鶏肉を使うようになりました。

作り方は、鶏肉、ごぼう、蓮根、人参、竹の子、こんにゃくなどを食べやすい大きさに乱切りにし、油で炒めてからうま煮にします。また、地域によつては、里芋を入れることもあります。動物性たんぱく質、野菜、植物油を使って栄養的にもバランスのよい煮物といえるでしょう。また、冷めても美味しく庶民の代表的な料理ですね。

今回は、福岡の郷土料理にちなみ「福」です。

この文字はおめでたいイメージをもつ漢字の一つです。

辞典で調べると音(フク)訓(さいわい)とあります。

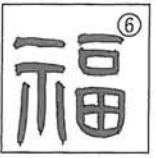
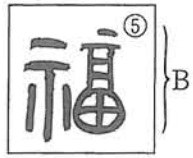
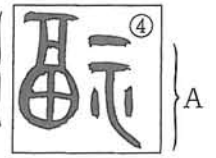


「福」の文字を甲骨文字で書くと①②③となり、金文では④⑤となります。また、篆文では⑥となります。

Aの部分、神を祭るとき祭卓を示しています。③のように省略されているものもあります。また、④のように左右が変わることもあります。縦棒の左右はお酒などをふり清めている形です。上部の横棒は祭卓に肉や野菜などを置きお供えしていることを表します。

Bの部分は、酒樽のように、下部にふくらみのある器の形です。②③の古い時代の文字には、人の両手が加えられています。これは神に肅と酒を捧げているようすを表しています。

古い書籍に「福



祐也 从示 畱聲 (略)。「福は、祐(天の)くるなり 不(神事)に従ひ、畱が音(略)」とした一文があります。

福は、神前に酒樽を供えて祭り人々の幸を求めることをいいます。

文字の意味も「しあわせ・神からさずけられたさいわい」(幸福・受福・多福・福運)「めでたい長命」(寿福・福寿)「神の与える助け」(福音)「神が祭りの供物を受けて人に福を下す」(福饗)といったところ



草書

行書

楷書

隸書

